

国際教育の先駆者として 日本と世界の 懸け橋になりたい

国際化の時代といわれて久しいなかで、日本の将来を担う人材育成の在り方が問われている。開発途上国を始めとする国際協力の現場で逞しく能力を発揮する若者を、これからの大学はどのように育てていくのか。国際情勢に詳しいジャーナリスト・池上彰氏を招き、開発経済学の専門家でもある拓殖大学学長・渡辺利夫氏と語り合ってもらった。

建学の精神に立ち返り、海外に飛躍して
地域貢献する若者を育てる。

池上 じつは、私は拓殖大学にご縁があるのです。2005年3月にNHKを早期定年退職したのですが、当時「もっと自分で国際情勢などの現場をみて物事を書きたい。そのため勉強したい」と思っています。

た。そのときに拓殖大学の社会人向け講座であるアジア塾を知り、これはいい！と感じて受講したのです。もちろん渡辺先生の開講授業も受け、開発経済学や貧困問題の話なども聞かせていただきました。

国際社会で役に立つという経験は、
大きな自信や生きがいにつながる。



ジャーナリスト

池上 彰

いけがみ あきら

1950年生。慶応義塾大学卒業後、1973年NHK入局。報道記者として活躍し、1994年よりNHK「週刊こどもニュース」でキャスター(お父さん役)を務める。2005年3月にNHKを退社し、現在はフリージャーナリストとして活躍。著書に「そうだったのか! 現代史」「相手に伝わる話し方」「池上彰の情報力」など多数。

渡辺 大変ありがとうございます(笑)。アジア塾は、2000年に拓殖大学が建学百周年を迎えて国際開発学部(現・国際学部)を創設したのですが、その2年前から手がけた社会貢献のための取り組みです。拓殖大学は、「アジアに顔を向けた大学」をキャッチフレーズに掲げていますが、もともと建学自体が、戦前の台湾における開拓と殖民、つまり拓殖のための若い人材の養成にあったわけですね。

池上 海外に飛躍して地域貢献する若者を育てるといふ精神が、大学の名前としても受け継がれてきたのですね。渡辺 おっしゃる通りです。ただ、戦後の思潮にあつては、植民地統治の人材育成ではないかというイメージを持たれたことがあり、本大学の特徴を出しにくい時代もありました。しかし冷戦も終わり、新たな国際社会における日本の役割が

問われるなかで、私たちは拓殖大学本来の建学の精神に一度立ち返ろうと決意しました。その象徴が国際学部の創設です。そうした私たちの「サポーター」を広くつくりたいという考えから、アジア塾など社会人向けの講座も展開してき

国際協力の「現場」に生きる
新しい教育を発信する。

池上 渡辺先生は開発論の専門家ですが、国際学部ではど

んな特色を打ち出しているのですか？



拓殖大学 学長

渡辺 利夫 わたなべ としお

1939年生。慶應義塾大学卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。05年4月より現職。ODA総合戦略会議議長代理。外務省国際協力有識者会議議長。第17期日本学術会議会員。JICA功労賞。外務大臣表彰。主筆に「成長のアジア 停滞のアジア」(東洋経済社、吉野作造賞)、「開発経済学」(日本評論社、大平正芳記念賞)など。

平均的な学生たちが変わらねば 日本は変わらない。

渡辺 一言でいえば「現場主義」です。国際協力の、特に開発の現場に生きる実践的な教育をめざしております。「開発学」と「地域研究」を融合・連携させることが重要だと私は考えています。開発という文脈のなかで地域を研究し、開発を学ぶ者も地域についての深い知識と経験をもつ。こうした新しい国際教育を発信するために、教員もすべて海外の開発現場などで数年の駐在経験をもった人材を揃えています。

向けることの重要性を、どのようにアピールされているのでしょうか。
渡辺 私が学生によく話しているのは「自分の顔は自分には見えない」ということです。つまり日本を知るためには、外国あるいは異文化という鏡に日本の顔を映し出す必要がある。さらに自分の全身を知るためには、一枚の鏡より三面鏡でみたほうがいいんだと言っています。

池上 なるほど。欧米という鏡だけでなく、アジアという鏡でも自らを見ることが必要だということわけですね。私もアジアを見て考えさせられたことは多いです。たとえば7年前に取材でベトナムに行った時の話ですが、どの街でも、みやげものなどを売っている若い店員たちの多くが、お客さんが少ない暑い昼間、物陰で熱心に本を読んでいる光景を見ました。この国は発展するぞと思いましたが、やはり急速に成長してきましたよね。一方で、豊かななった日本には、そのような向学心をもつ若者がどれくらいいるのか、気になるところです。

他人や他国のための開発に携わることで、自分自身が開発されていく。

渡辺 大学教育の在り方が問われる点でもありますね。ただ私の見るところ、今の日本の学生は豊かである分、「他人のためにいいことをしたい」という気持ち将我々の世代よりもはるかに強く内在させているように見えます。しかし、この暖衣飽食の日本で普通に暮らしている、困っている人も弱い人もいるはずなのに、彼らの目にその姿が入ってこないんです。そういう学生たちを、例えばマニラに1か月ほどホームステイさせ、現地の信頼できるNGOと組んでストーリーテラードレンの世話をさせたり、スモーカーマウンテンの子供会の指導に当たる活動などに加わらせています。3割くらいの学生は、誇らしく晴れがましい非常にいい顔をして帰ってきます。

池上 それは貴重な経験になりますね。社会や他人のために役に立っている自分の存在を認めることによって、自信や生きがい、さらには「共生感」を持つようになるはずですから。
渡辺 本心にそうですね。他人や他国の開発に携わることで、自分自身が開発されていくのです。そうした海外研修を行い、現場で仕事を体験させる。そうすることによって、教室の勉強との相乗効果も大きくなります。「公に生きる精神を身につける」という拓殖大学らしい教育の在り方をさらに追究したいですね。

池上 これからの大学は、そのように若者の心を発揚させる教育というものを考えていかなければなりませんね。
渡辺 それも一部のエリートではなく、ごく平均的な学生たちに働きかけることにより初めて日本は変わるのだと思います。私は、「拓大が変われば日本は変わる」といい続けているわけですよ(笑)。
池上 ぜひこれからも、世界との懸け橋になる若者をたくさん育てていってください。

